

2021 年度 慶応義塾大学 医学部 数学

[I]

(1)

(あ)	(い)	(う)
$\frac{5\sqrt{5}}{7}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{5\sqrt{3}}{14}$

$$-5\vec{OA} + 7\vec{OB} + 8\vec{OC} = \vec{0} \text{ より,}$$

$$5\vec{OA} = 7\vec{OB} + 8\vec{OC} \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

であるから、この両辺の大きさの 2 乗を考え、 $|\vec{OA}| = |\vec{OB}| = |\vec{OC}| = 1$ を用いると、

$$|5\vec{OA}|^2 = |7\vec{OB} + 8\vec{OC}|^2$$

$$\therefore 25|\vec{OA}|^2 = 49|\vec{OB}|^2 + 112\vec{OB} \cdot \vec{OC} + 64|\vec{OC}|^2$$

$$\therefore 25 = 49 + 112\vec{OB} \cdot \vec{OC} + 64$$

$$\therefore \vec{OB} \cdot \vec{OC} = \frac{25 - (49 + 64)}{112} = -\frac{11}{14}$$

を得る。したがって、

$$|\vec{BC}|^2 = |\vec{OC} - \vec{OB}|^2 = |\vec{OC}|^2 - 2\vec{OB} \cdot \vec{OC} + |\vec{OB}|^2 = 1 + \frac{11}{7} + 1 = \frac{25}{7}$$

より、

$$BC = |\vec{BC}| = \frac{5}{\sqrt{7}} = \frac{5\sqrt{7}}{7}$$

である。また、 $\textcircled{1}$ より、

$$\vec{OA} = \frac{15}{5} \frac{7\vec{OB} + 8\vec{OC}}{8+7}$$

であるから、OA を 1 : 2 に内分する点と BC を 8 : 7 に内分する点は一致する。したがって、この一致した点が P であるから、

$$OP = \frac{1}{3}OA = \frac{1}{3}$$

である。このことから、

$$\triangle ABC = 2\triangle OBC = 2 \cdot \frac{1}{2} \sqrt{|\vec{OB}|^2 |\vec{OC}|^2 - (\vec{OB} \cdot \vec{OC})^2} = \sqrt{1 - \left(-\frac{11}{14}\right)^2}$$

$$= \sqrt{\frac{14^2 - 11^2}{14^2}} = \frac{\sqrt{(14+11)(14-11)}}{14} = \frac{5\sqrt{3}}{14}$$

である。

(え)	(お)
$\frac{\pi}{3m}$	$\frac{2}{5}$

(2)

曲線 $y = x^\alpha - mx$ と x 軸との交点の x 座標を $x = 0, t$ とすると,

$$x^\alpha - mx = x(x^{\alpha-1} - m) \text{ より, } t = m^{\frac{1}{\alpha-1}} \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

である。これを用いると,

$$\begin{aligned} V &= \int_0^t \pi y^2 dx = \pi \int_0^t (x^\alpha - mx)^2 dx = \pi \int_0^t (x^{2\alpha} - 2mx^{\alpha+1} + m^2x^2) dx \\ &= \left[\frac{x^{2\alpha+1}}{2\alpha+1} - \frac{2m}{\alpha+2}x^{\alpha+2} + \frac{m^2}{3}x^3 \right]_0^t \\ &= \pi \left(\frac{t^{2\alpha+1}}{2\alpha+1} - \frac{2m}{\alpha+2}t^{\alpha+2} + \frac{m^2}{3}t^3 \right) \\ &= \pi \left(\frac{m^{\frac{2\alpha+1}{\alpha-1}}}{2\alpha+1} - \frac{2}{\alpha+2}m^{1+\frac{\alpha+2}{\alpha-1}} + \frac{1}{3}m^{2+\frac{3}{\alpha-1}} \right) \\ &= \left(\frac{1}{2\alpha+1} - \frac{2}{\alpha+2} + \frac{1}{3} \right) m^{\frac{2\alpha+1}{\alpha-1}} \pi \end{aligned}$$

となる。したがって、 m を固定するとき,

$$\begin{aligned} \lim_{\alpha \rightarrow +0} V &= \lim_{\alpha \rightarrow +0} \left(\frac{1}{2\alpha+1} - \frac{2}{\alpha+2} + \frac{1}{3} \right) m^{\frac{2\alpha+1}{\alpha-1}} \pi = \left(1 - 1 + \frac{1}{3} \right) m^{-1} \pi \\ &= \frac{\pi}{3m} \end{aligned}$$

である。一方、 α を固定するとき,

$$\lim_{m \rightarrow \infty} m^3 \cdot m^{\frac{2\alpha+1}{\alpha-1}} = \lim_{m \rightarrow \infty} m^{\frac{5\alpha-2}{\alpha-1}} = \begin{cases} \infty & \left(0 < \alpha < \frac{2}{5} \text{ のとき} \right) \\ 1 & \left(\alpha = \frac{2}{5} \text{ のとき} \right) \\ 0 & \left(\frac{2}{5} < \alpha < 1 \text{ のとき} \right) \end{cases}$$

であるから、 $\lim_{m \rightarrow \infty} m^3 V$ が 0 でない数に収束するためには、 $\alpha = \frac{2}{5}$ が必要であり、逆に

$\alpha = \frac{2}{5}$ のとき,

$$\lim_{m \rightarrow \infty} m^3 V = \pi \left(\frac{1}{\frac{4}{5} + 1} - \frac{2}{\frac{2}{5} + 2} + \frac{1}{3} \right) = \frac{\pi}{18}$$

となり、確かに $\lim_{m \rightarrow \infty} m^3 V$ は 0 でない数に収束する。よって、求める α は,

$$\alpha = \frac{2}{5}$$

である.

(3)

(か)	(き)	(く)	(け)	(こ)
176	2	6	8	3

$f(x) = x^2 + kx + k + 35$ とおくと,

$$f(x) = \left(x + \frac{k}{2}\right)^2 - \frac{1}{4}k^2 + k + 35 = \left(x + \frac{k}{2}\right)^2 - \frac{1}{4}(k+10)(k-14)$$

・ α_k, β_k がともに実数で, $\alpha_k \neq \beta_k$ であるための条件は,

$$f\left(-\frac{k}{2}\right) < 0 \quad \therefore (k+10)(k-14) > 0 \quad \therefore k < -10 \text{ または } 14 < k$$

であるから,

$$A = \{k \mid k \text{ は整数, かつ } (-100 \leq k < -10 \text{ または } 14 < k \leq 100)\}$$

したがって,

$$n(A) = 90 + 86 = 176$$

また,

$$\bar{A} = \{k \mid k \text{ は整数, かつ } -10 \leq k \leq 14\}$$

であり, $k \in \bar{A}$ のもとでは, $f(x) = 0$ の解は, $-\frac{k}{2} \pm \frac{\sqrt{-(k+10)(k-14)}}{2}i$ ……①となる.

・ α_k, β_k がともに実数で, $\alpha_k \neq \beta_k$ であり, かつ, α_k, β_k の実部がともに 2 より大きいため

の条件は, $k \in A$ のもとで,

$$-\frac{k}{2} > 2 \text{ かつ } f(2) > 0 \quad \therefore k < -4 \text{ かつ } 3k + 39 > 0 \quad -13 < k < -4$$

となることであるから,

$$A \cap B = \{k \mid k \text{ は整数, かつ } -13 < k < -10\} \quad \therefore n(A \cap B) = 2$$

・ 「 α_k, β_k がともに実数で, $\alpha_k \neq \beta_k$ 」ではなく, かつ, α_k, β_k の実部がともに 2 より大き

いたための条件は, $k \in \bar{A}$ のもとで, ①より,

$$-\frac{k}{2} > 2 \quad \therefore k < -4$$

となることであるから、

$$\overline{A} \cap B = \{k \mid k \text{ は整数, かつ } -10 \leq k < -4\} \quad \therefore n(\overline{A} \cap B) = 6$$

・ α_k, β_k がともに実数で、 $\alpha_k \neq \beta_k$ であり、かつ、 α_k, β_k の実部と虚部が全て整数であるための条件は、 $k \in A$ のもとで、 α_k, β_k が相異なる 2 整数となることである。……②

いま、 $f(x) = 0$ について、解と係数の関係より、

$$\alpha_k + \beta_k = -k \quad \cdots \cdots \textcircled{3} \quad \text{かつ} \quad \alpha_k \beta_k = k + 35$$

が成り立つから、これらより、 α_k, β_k は、

$$\alpha_k \beta_k + \alpha_k + \beta_k = 35 \quad \therefore (\alpha_k + 1)(\beta_k + 1) = 36 (= 2^2 \cdot 3^2) \quad \cdots \cdots \textcircled{4}$$

を満たす。

②より、④において、 $\alpha_k < \beta_k$ であるとする、

$$(\alpha_k + 1, \beta_k + 1) = (-36, -1), (-18, -2), (-12, -3), (-9, -4), \\ (1, 36), (2, 18), (3, 12), (4, 9)$$

$$\therefore (\alpha_k, \beta_k) = (-37, -2), (-19, -3), (-13, -4), (-10, -5), (0, 35), (1, 17), (2, 11), (3, 8)$$

であるから、③とあわせると、

$$A \cap C = \{39, 22, 17, 15, -35, -18, -13, -11\} \quad \therefore n(A \cap C) = 8$$

・「 α_k, β_k がともに実数で、 $\alpha_k \neq \beta_k$ 」ではなく、かつ、 α_k, β_k の実部と虚部が全て整数であるための条件は、 $k \in \overline{A}$ のもとで、①より、

$$-\frac{k}{2}, \frac{\sqrt{-(k+10)(k-14)}}{2} \text{ がともに整数である}$$

ことであり、これは、 $k = 2l$ (l は整数で、 $-5 \leq l \leq 7$ ……⑤) とおくと、

$$\frac{\sqrt{-(2l+10)(2l-14)}}{2} = \sqrt{-(l+5)(l-7)} \text{ が整数となる}$$

ことと同値であるから、⑤のもとで、これを満たすものを調べれば、

$$l = -5, 1, 7 \quad \therefore \overline{A} \cap C = \{-10, 2, 14\} \quad \therefore n(\overline{A} \cap C) = 3$$

[II]

	(あ)	(い)
(1)	$\frac{1}{2}(n+1)$	$\frac{1}{12}(n+1)(n-1)$

x_i ($1 \leq i \leq n$) には $1, 2, \dots, n$ が 1 つずつ現れるから、

$$T = \sum_{k=1}^n k = \frac{1}{2}n(n+1), \quad U = \sum_{k=1}^n k^2 = \frac{1}{6}n(n+1)(2n+1)$$

とおくと、

$$\sum_{i=1}^n x_i = T, \quad \sum_{i=1}^n x_i^2 = U$$

である。よって、

$$\bar{x} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i = \frac{T}{n} = \frac{1}{2}(n+1)$$

$$\begin{aligned} s_x^2 &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i^2 - \bar{x}^2 = \frac{U}{n} - \bar{x}^2 = \frac{1}{6}(n+1)(2n+1) - \frac{1}{4}(n+1)^2 \\ &= \frac{1}{12}(n+1)(n-1) \end{aligned}$$

であり、同様に、

$$\sum_{i=1}^n y_i = T, \quad \sum_{i=1}^n y_i^2 = U, \quad \bar{y} = \frac{1}{2}(n+1), \quad s_y^2 = \frac{1}{12}(n+1)(n-1)$$

である。

$$\begin{aligned} (2) \quad s_{xy} &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y}) = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i y_i - x_i \bar{y} - \bar{x} y_i + \bar{x} \bar{y}) \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i y_i - \bar{y} \cdot \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i - \bar{x} \cdot \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n y_i + \frac{1}{n} \cdot n \bar{x} \bar{y} \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i y_i - \bar{y} \bar{x} - \bar{x} \bar{y} + \bar{x} \bar{y} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i y_i - \bar{x} \bar{y} \quad \dots\dots\dots \textcircled{1} \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i y_i - \frac{1}{4}(n+1)^2 \\ \therefore 4ns_{xy} &= 4 \sum_{i=1}^n x_i y_i - n(n+1)^2 \end{aligned}$$

ここで、 $\sum_{i=1}^n x_i y_i$ は整数であるから、 $4 \sum_{i=1}^n x_i y_i$ は 4 の倍数であるが、 n が奇数の 2 倍であ

ることより, $n(n+1)^2$ は奇数の 2 倍であり, 4 の倍数ではないから,

$$4ns_{xy} \neq 0 \quad \therefore s_{xy} \neq 0$$

である.

$$(3) \quad \begin{array}{|c|c|} \hline (う) & (え) \\ \hline (n-1)n(n+1) & \sum_{i=1}^n d_i^2 \\ \hline \end{array}$$

$d_i = x_i - y_i$ を用いると,

$$x_i y_i = \frac{x_i^2 + y_i^2 - (x_i - y_i)^2}{2} = \frac{x_i^2 + y_i^2 - d_i^2}{2}$$

であるから, ① より,

$$s_{xy} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \frac{x_i^2 + y_i^2 - d_i^2}{2} - \bar{x}\bar{y}$$

となり,

$$\sum_{i=1}^n x_i^2 = \sum_{i=1}^n y_i^2, \quad \bar{x} = \bar{y}$$

であることに注意すれば,

$$\begin{aligned} s_{xy} &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \frac{x_i^2 + y_i^2 - d_i^2}{2} - \bar{x}\bar{y} \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i^2 - \frac{1}{2n} \sum_{i=1}^n d_i^2 - \bar{x}^2 = s_x^2 - \frac{1}{2n} \sum_{i=1}^n d_i^2 \end{aligned}$$

となる. したがって, $s_x = s_y$ であることも用いれば,

$$r = \frac{s_{xy}}{s_x s_y} = \frac{s_x^2 - \frac{1}{2n} \sum_{i=1}^n d_i^2}{s_x^2}$$

であり, (1) の結果とあわせて,

$$r = 1 - \frac{1}{2ns_x^2} \sum_{i=1}^n d_i^2 = 1 - \frac{6}{(n-1)n(n+1)} \sum_{i=1}^n d_i^2$$

となる.

$$(4) \quad \begin{array}{|c|c|c|c|} \hline (お) & (か) & (き) & (く) \\ \hline x_i & 1 & n+1-x_i & -1 \\ \hline \end{array}$$

(3) より, r が最大となるのは, $\sum_{i=1}^n d_i^2 = \sum_{i=1}^n (x_i - y_i)^2$ が最小となるときであるから,

$y_i = x_i$ ($1 \leq i \leq n$) のときであり, 最大値は 1 である.

一方,

$$r = \frac{s_{xy}}{s_x s_y} = \frac{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i y_i - \frac{1}{4}(n+1)^2}{\frac{1}{12}(n+1)(n-1)}$$

であるから, r が最小となるのは, $\sum_{i=1}^n x_i y_i$ が最小となるときである.

いま, $n+1-x_i$ ($1 \leq i \leq n$) に $1, 2, \dots, n$ が 1 つずつ現れることより,

$$\sum_{i=1}^n (n+1-x_i) = T, \quad \sum_{i=1}^n (n+1-x_i)^2 = U$$

であるから,

$$\sum_{i=1}^n \{y_i - (n+1-x_i)\}^2 \geq 0$$

より,

$$\sum_{i=1}^n y_i^2 - 2 \sum_{i=1}^n (n+1-x_i)y_i + \sum_{i=1}^n (n+1-x_i)^2 \geq 0$$

$$\therefore U - 2(n+1)T + 2 \sum_{i=1}^n x_i y_i + U \geq 0$$

$$\therefore \sum_{i=1}^n x_i y_i \geq (n+1)T - U$$

であり, 等号は $y_i = n+1-x_i$ ($1 \leq i \leq n$) のときに成り立つ.

以上により, r はこのとき最小となり, 最小値は,

$$\begin{aligned} r &= \frac{\frac{(n+1)T - U}{n} - \frac{1}{4}(n+1)^2}{\frac{1}{12}(n+1)(n-1)} \\ &= \frac{\frac{1}{2}(n+1)^2 - \frac{1}{6}(n+1)(2n+1) - \frac{1}{4}(n+1)^2}{\frac{1}{12}(n+1)(n-1)} = -1 \end{aligned}$$

である.

[Ⅲ]

$h > 0, g > 0, h \neq g$ のもとで, A, Q のそれぞれの点に立っている塔の先端を A', Q' とすると, A, Q とは異なる点 P から 2 つの塔の先端を見上げる角度が等しくなるのは, 2 つの三角形 PAA', PQQ' が相似となるとき, すなわち,

$$PA : AA' = PQ : QQ' \quad \therefore PA : h = PQ : g \quad \therefore hPQ = gPA$$

となるときである. 特に, $P(X, Y)$ とおけば, これは,

$$h^2 PQ^2 = g^2 PA^2 \quad \therefore h^2 \{(X-x)^2 + (Y-y)^2\} = g^2 \{X^2 + (Y-1)^2\} \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

と表される.

(1)

(あ)	(い)	(う)
$\frac{h^2 T}{h^2 - g^2}$	1	$\frac{hgT}{ h^2 - g^2 }$

$Q(T, 1)$ ($T > 0$), すなわち, $x = T, y = 1$ のとき, $\textcircled{1}$ は,

$$h^2 \{(X-T)^2 + (Y-1)^2\} = g^2 \{X^2 + (Y-1)^2\}$$

$$\therefore X^2 - \frac{2h^2 T}{h^2 - g^2} X + \frac{h^2 T^2}{h^2 - g^2} + (Y-1)^2 = 0$$

$$\therefore \left(X - \frac{h^2 T}{h^2 - g^2}\right)^2 + (Y-1)^2 = \left(\frac{h^2 T}{h^2 - g^2}\right)^2 - \frac{h^2 T^2}{h^2 - g^2}$$

$$\therefore \left(X - \frac{h^2 T}{h^2 - g^2}\right)^2 + (Y-1)^2 = \left(\frac{hgT}{h^2 - g^2}\right)^2$$

となるから, 点 P は,

$$\text{中心} \left(\frac{h^2 T}{h^2 - g^2}, 1\right), \text{半径} \left|\frac{hgT}{h^2 - g^2}\right| = \frac{hgT}{|h^2 - g^2|}$$

の円周上にある.

(2)

(え)	(お), (か)
$h > g$	$y = \pm \frac{\sqrt{h^2 - g^2}}{g} x + 1$

点Pでy軸上にあるものがただ1つであるとき、①で $X=0$ として得られるYについての方程式

$$h^2 \{x^2 + (Y-y)^2\} = g^2 (Y-1)^2 \quad \dots\dots ②$$

はただ1つの解をもつ……③.

いま、②が $Y=1$ を解にもつとすると、

$$h^2 \{x^2 + (1-y)^2\} = 0 \quad \therefore x^2 + (1-y)^2 = 0 \quad \therefore (x, y) = (0, 1)$$

となり、A, Qが異なることに反する。よって、②, すなわち、

$$(h^2 - g^2)Y^2 - 2(h^2y - 2g^2)Y + h^2(x^2 + y^2) - g^2 = 0$$

が $Y=1$ を解にもつことはないから、③より、この方程式は重解をもつ。

したがって、

$$(h^2y - 2g^2)^2 - (h^2 - g^2)\{h^2(x^2 + y^2) - g^2\} = 0$$

$$\therefore h^2 \{g^2(y-1)^2 - (h^2 - g^2)x^2\} = 0 \quad \therefore (y-1)^2 = \frac{h^2 - g^2}{g^2} x^2 \quad \dots\dots ④$$

であり、これを満たす実数の組 $(x, y) (\neq (0, 1))$ が存在するための条件は、

$$\frac{h^2 - g^2}{g^2} \geq 0 \quad \therefore h > g$$

である。

また、このとき、④より、

$$y-1 = \pm \frac{\sqrt{h^2 - g^2}}{g} x \quad \therefore y = \pm \frac{\sqrt{h^2 - g^2}}{g} x + 1$$

であるから、点Qは2直線 $y = \pm \frac{\sqrt{h^2 - g^2}}{g}x + 1$ のいずれかの上にある。

(3)

(き)	(く)	(け)	(こ)	(さ)	(し), (す) (せ), (そ)	(た), (ち) (つ), (て)	(と)
$\frac{h^2}{g^2 - h^2}$	0	$\frac{h^2}{g^2}$	0	$g > h$	(0, ±1)	(0, ±1)	$\sqrt{2}$

点Pでx軸上にあるものがただ1つであるとき、①で $Y=0$ として得られるXについての方程式、

$$h^2 \{(X-x)^2 + y^2\} = g^2(X^2 + 1) \quad \therefore (h^2 - g^2)X^2 - 2h^2xX + h^2(x^2 + y^2) - g^2 = 0$$

は重解をもつから、

$$(h^2x)^2 - (h^2 - g^2)\{h^2(x^2 + y^2) - g^2\} = 0$$

$$\therefore h^2g^2x^2 - h^2(h^2 - g^2)y^2 = g^2(g^2 - h^2) \quad \therefore \frac{h^2}{g^2 - h^2}x^2 + \frac{h^2}{g^2}y^2 = 1 \quad \dots\dots⑤$$

よって、点Qは、⑤で表される2次曲線C上にある。Cが楕円であるのは、

$$\frac{h^2}{g^2 - h^2} > 0 \quad \therefore g > h \quad \dots\dots⑥$$

のときであり、このとき、Cの2つの焦点の座標は、

$$\left(0, \pm \sqrt{\frac{g^2}{h^2} - \frac{g^2 - h^2}{h^2}}\right) \quad \therefore (0, \pm 1)$$

である。

また、⑥が成り立たないとき、すなわち、 $h > g$ のとき、Cは双曲線

$$-\frac{h^2}{h^2 - g^2}x^2 + \frac{h^2}{g^2}y^2 = 1$$

となり、Cの2つの焦点の座標は、

$$\left(0, \pm \sqrt{\frac{g^2}{h^2} + \frac{h^2 - g^2}{h^2}}\right) \quad \therefore (0, \pm 1)$$

である.

さらに, このとき, C の漸近線は, $y = \pm \frac{g}{\sqrt{h^2 - g^2}} x$ であるから,

$$\frac{g}{\sqrt{h^2 - g^2}} \cdot \left(-\frac{g}{\sqrt{h^2 - g^2}} \right) = -1 \quad \therefore g^2 = h^2 - g^2 \quad \therefore \frac{h}{g} = \sqrt{2}$$

のとき, C は直角双曲線となる.

[IV]

(あ)	(い)	(う)
$t - \frac{r(e^t - e^{-t})}{e^t + e^{-t}}$	$\frac{e^t + e^{-t}}{2} + \frac{2r}{e^t + e^{-t}}$	$0 < r \leq 1$

(え)	(お)	(か)
$\log(\sqrt{r} + \sqrt{r-1})$	$2\sqrt{r}$	$\frac{Y^2 - 2r + Y\sqrt{Y^2 - 4r}}{2}$

$f(x) = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$ とおくと,

$$f'(x) = \frac{e^x - e^{-x}}{2}, f''(x) = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$$

であるから,

$$\{f(x)\}^2 - \{f'(x)\}^2 = 1 \dots\dots ①, f''(x) = f(x) \dots\dots ②$$

が成り立つ.

また,

$$f(x) \geq \sqrt{e^x \cdot e^{-x}} = 1 \text{ (等号成立} \iff e^x = e^{-x} \text{ すなわち } x = 0) \dots\dots ③$$

が成り立つ.

さて, $t > 0$ において $f'(t) = \frac{e^t - e^{-t}}{2} > 0 \dots\dots ④$ であることより, $P(t, f(t))$ における

C の法線の傾きは $-\frac{1}{f'(t)}$ であるから, 法線方向ベクトル (の 1 つ) は $\vec{n} = (-f'(t), 1)$ で

あり, \vec{n} の x 成分は負である.

よって, \vec{PQ} は \vec{n} と同じ向きであるから, $|\vec{PQ}| = r$ も考慮し, ①, ③ を用いれば,

$$\vec{PQ} = \frac{r}{|\vec{n}|} \vec{n} = \frac{r}{\sqrt{\{f'(t)\}^2 + 1}} (-f'(t), 1) = \frac{r}{f(t)} (-f'(t), 1)$$

となり, $\vec{OQ} = \vec{OP} + \vec{PQ}$ より,

$$X = t - \frac{rf'(t)}{f(t)} = t - \frac{r(e^t - e^{-t})}{e^t + e^{-t}}, Y = f(t) + \frac{r}{f(t)} = \frac{e^t + e^{-t}}{2} + \frac{2r}{e^t + e^{-t}}$$

となる.

これより,

$$\begin{aligned}
X'(t) &= 1 - r \frac{f''(t) \cdot f(t) - f'(t) \cdot f'(t)}{\{f(t)\}^2} = 1 - r \frac{\{f(t)\}^2 - \{f'(t)\}^2}{\{f(t)\}^2} = 1 - \frac{r}{\{f(t)\}^2} \\
&= \frac{\{f(t) + \sqrt{r}\}\{f(t) - \sqrt{r}\}}{\{f(t)\}^2} \\
Y'(t) &= f'(t) - \frac{r f'(t)}{\{f(t)\}^2} = f'(t) X'(t) \quad \dots\dots ⑤
\end{aligned}$$

である。

(a) $0 < r \leq 1$ のとき、③ に注意すると、 $X'(t) > 0$ ($t > 0$) であるから、 $t > 0$ で $X(t)$ は増加する。

(b) $r > 1$ のとき、

$$\begin{aligned}
f(t) - \sqrt{r} &= \frac{e^t + e^{-t}}{2} - \sqrt{r} = \frac{(e^t)^2 - 2\sqrt{r}e^t + 1}{2e^t} \\
&= \frac{1}{2e^t} \{e^t - (\sqrt{r} + \sqrt{r-1})\} \{e^t - (\sqrt{r} - \sqrt{r-1})\} \\
&= \frac{1}{2e^t} \{e^t - (\sqrt{r} + \sqrt{r-1})\} \left(e^t - \frac{1}{\sqrt{r} + \sqrt{r-1}} \right)
\end{aligned}$$

であり、 $0 < \frac{1}{\sqrt{r} + \sqrt{r-1}} < 1 < \sqrt{r} + \sqrt{r-1}$ であることと、③ より、 $X(t)$ の増減は下表のようになる。

t	(0)	...	$\log(\sqrt{r} + \sqrt{r-1})$...
$X'(t)$		-	0	+
$X(t)$	(0)	↘		↗

(a), (b) の考察と、 $X(0) = 0$ であることより、すべての $t > 0$ に対して $X(t) > 0$ となるための条件は、

$$0 < r \leq 1 \quad \dots\dots ⑥$$

である。⑥ が成り立たないとき、すなわち、 $r > 1$ のとき、④, ⑤ より、 $Y(t)$ の増減は $X(t)$ の増減と一致する …… ⑦ から、(b) の増減表より、 $Y(t)$ は $t = \log(\sqrt{r} + \sqrt{r-1})$ において最小となり、このとき、 $f(t) = \sqrt{r}$ であるから、最小値は $2\sqrt{r}$ である。

また、⑥ が成り立つとき、⑤ より、

$$\frac{dY}{dX} = \frac{Y'(t)}{X'(t)} = f'(t)$$

であるから、② より、

$$\left(\frac{dY}{dX} \right)^2 + 1 = \{f'(t)\}^2 + 1 = \{f(t)\}^2$$

であり, $Y = f(t) + \frac{r}{f(t)}$ より,

$$\{f(t)\}^2 - Yf(t) + r = 0 \quad \therefore f(t) = \frac{Y \pm \sqrt{Y^2 - 4r}}{2}$$

である.

いま, ⑦ より, $Y(t) > Y(0) = 1 + r$ であるから,

$$Y^2 - 4r > (1 + r)^2 - 4r = 1 - 2r + r^2 = (1 - r)^2$$

であり, $1 - r \geq 0$ であることに注意すると,

$$\frac{Y + \sqrt{Y^2 - 4r}}{2} > \frac{(1 + r) + (1 - r)}{2} = 1$$

$$\frac{Y - \sqrt{Y^2 - 4r}}{2} = \frac{2r}{Y + \sqrt{Y^2 - 4r}} < \frac{2r}{(1 + r) + (1 - r)} < r \leq 1$$

である. よって, ③ より,

$$f(t) = \frac{Y + \sqrt{Y^2 - 4r}}{2}$$

である. 以上により,

$$\left(\frac{dY}{dX}\right)^2 + 1 = \left(\frac{Y + \sqrt{Y^2 - 4r}}{2}\right)^2 = \frac{Y^2 - 2r + Y\sqrt{Y^2 - 4r}}{2}$$

となる.